

『都市美と建築』

黒田鵬心 著

趣味普及会 [刊] 1954年3月 B6判 / 316頁 図書番号 0B-0754

黒田鵬心（本名：朋信、1885—1967）は美術、建築に関する評論家として知られ、多数の著作がある。本書は「鵬心選集」全10巻の第8巻として刊行され、著者が戦前期に執筆した「都市の美観と建築」（1914年刊）、「建築と趣味生活」（1924年刊）、「都市の美装」（1928年刊）の3作が収録されている。

本書の第1部「帝都の美観と建築」は、明治末から大正にかけて新聞や雑誌に寄稿された、東京市内の建築物に対する批評をまとめたものである。この中で著者は、人々から「建築が軽視され」「都市の美観が等閑に附せられている」のは遺憾であり、自身の批評を通じ「建築に対する常識の発達と、趣味の普及とを計り、以て都市の美観を高めたい」と述べている。そのため、美観を損ねると感じた建築物に対して、「博品館と天下堂とは何れも劣らず奇醜俗惡の競争をやっている」「日本火災保険株式会社は（中略）一寸立派の様だが如何にもお粗末な醜いものである」といった辛辣な批評をしている。

第2部「都市の美装」では、都市美について論じる。著者は「一都市内の部分的美が相互に又全体として統一され」「総べてが互いに調和した総合美」が都市美であり、都市美を成す具体的要素は「都市の位置、プランニング、建築、記念像、橋梁、街路付属物、河溝、公園、看板広告、運輸交通機関、燈火」であるとする。そして「都市美装の具体的一例」として、東京市を取り上げる。その美観に関して著者は、建築条例で建物の高さ制限はあっても低さの制限がないこと、記念像を建てられる広場がないこと、照明設備が不十分で明るさが足りないこと等多くの問題点を指摘する。最後に建築中の国会議事堂に触れ、「中心を持たぬ我が東京市の如きは将来どうしても国会議事堂などが一大中心となって、全都市を美装してゆかねばなるまい」とまとめている。

第3部「建築と趣味生活」では、関東大震災からの復興に着目する。著者は「今回の災害は犠牲としては実に甚大」であるが、東京を「徹底的に改造」し、「理想が実現出来る絶好の機会」だとしている。そしてそのためには、「理想的の復興計画を立てる」ことが必要だとする。著者自身も「多少の愚見を述べて御参考に供したい」として、市内の道路の幅員を広げること、運河や掘割を整理し系統的な水路を設けること、増設・拡張した公園同士を連絡道路で結び公園系統を樹立すること、新規に商業・工業・官庁といった地域を定めることを提言している。また、震災後のバラック建築に対しては、「大体は木造建築で一時的のもの」であるから、建築家は「自由に自己の独創的意匠を發揮して貰いたい」としている。

巻末には附録として、「戦災後の東京に於ける未曾有の建築美」が掲載されている。これは本書のための書き下ろしで、本書刊行当時（1954年）の都内の新建築に言及したものである。東京の建築は「空襲火災によって大破壊を蒙った」が、戦争が終わると、「日活国際会館」や「ブリッジストンビル」といった大型建築物が次々建てられた。著者は「東京都の建築的美観は大災害に会ったにも拘らず未曾有の盛観を呈するに至った」として、これら「戦後の新建築」を評価している。

（井上学・市政専門図書館司書）